

佐野常世の瘦せ馬

伊海孝充

『奈良土産』(貞享四年(一六八七)刊)は、奈良へ薪能見物に行く途中、常々考えていた謡の難点を記した、という設定で書かれた風変わりな書である。その内容は学問的というより言葉の用法の矛盾を穿鑿するような指摘が多いが、時には能の内容自体に難癖をつけることもある。例えば『鉢木』。零落した佐野常世が貧しいながらも馬を所持することについて、「社会的身分がある人でも、知行が少ないと馬は所有できないのだから、常世には到底無理である」という。この疑問に対して、前書の返答集として刊行された『奈良土産返答』(貞享五年刊)は、「具足・長刀を保持するのは並のことだが、苦しい生活の中で馬を持つているということが常世の優れたところだ」と反論している。『鉢木』が常世の忠義心を称える曲であることを念頭に置くと、『奈良土産返答』の主張のほうに軍配が上がりそうだが、筆者は常世の馬が「瘦せ馬」であることに着目して、『奈良土産』に反論してみたい。

『鉢木』は、有名な最明寺入道(北条時頼)時頼廻国説話を基にしているが、特定の本説が

見出せない。常世が馬を持っていたという設定は、典拠があるのか、能作者の創意なのか判然としないが、その馬が「瘦せ馬」であることを踏まえると、能作者が作り出した設定である可能性が高い。この馬は、千切れた具足・錆びた長刀とともに困窮の様子を表現しているわけだが、他にも能にこそふさわしい作意が見出せるからである。

そもそも中世までの文芸作品の中に、「瘦せ馬」という語はあまり見かけることはないのだが、その中で複数の用例を見出させるのが漢詩文である。例えば杜甫はその馬を題した「瘦馬行」を詠んでいる(『杜甫詩注』吉川幸次郎著・興膳宏編、岩波書店、二〇一二年)。

東郊瘦馬使我傷 骨骼律兀如堵牆

絆之欲動軟欹側 此豈有意仍騰驥

細看六印帶官字 衆道三軍遺路旁

(後略)

漢詩における「瘦馬」は「不遇による困苦の象徴」であった(丸山茂『唐代の文化と詩人の心』汲古書院、二〇一〇年)。詩の中の瘦馬は六つの烙印があり、その中に「官」の字も見え、みんなが

官軍に捨てられた馬だとうわさをしているという(傍線部)。すなわちこの「瘦馬」も単にやせ細った馬ではなく、(官)の世界から疎外された馬なのである。高木正一は、杜甫がこの情景を見て詠んだわけではなく、華州の一地方官に貶められた境遇を瘦馬に託して詠んだとも指摘している(『杜甫の馬・鷹の詩について』『中國文學報』一九六二年十月)。

『杜甫詩注』に拠ると、この詩以前には「瘦馬」の二字は見えないらしいが、日本の五山詩を含め、後代の詩にはいくつも用例を見いだせる。さらにこれらの詩では、「独」という語と結びつき、「独騎瘦馬」と詠まれることもある。例えば江西詩派の晁叔用作「曉行」には「老去功名意轉疎 独騎瘦馬取長途」という句がある。これについて、如月寿印が編んだ抄

『中華若木詩抄』は次のように注釈している。

一二之句ハ、若キ時ハ、學問シテ功名ヲ立テテ、イカヤウノ官ニモナルベキト思タレバ、中年マデ指タル才能モナク官ニモ上ガラネバ、學問シテ何サマ功名ヲ立ント思タ心モ疎ニナルゾ。結局隙ナクシテ世事ニツラサレテ、瘦馬ニ乗テ遠路ニ赴ク也。長途ハ、長旅也。(新日本古典文学大系『中華若木詩抄』湯山聯句鈔『岩波書店、一九九五年])

瘦馬に跨り、長旅に向かう者は任官の夢に敗れた男である。つまり、この詩が描いているのは(官)の世界から疎外された者の姿であり、その男の乗り物が瘦馬なのである。

新日本古典文学大系脚注は、この句が蘇軾の詩の「苦寒念爾衣裘薄 独騎瘦馬踏残月」という句に依拠している可能性を指摘している。

これは、任官先へ赴く蘇軾と、任官を辞して父の世話のため都に留まる弟・蘇轍との離別を描いた詩の一節である。自ら望んだこととはいえ、一人瘦馬に跨り去っていく弟もまた、〈官〉の世界から離脱していく者なのである。

ほかに南宋の詩人・劉克莊も「秋葉蕭蕭 忽滿階 独騎瘦馬豫章台 莫將宋玉心中事 吹向潘郎鬢上來」という詩を残している（『秋風』）。落葉の中、瘦馬に乗り、不遇の人生を送った宋玉や三十代で急に白髪となった潘岳（潘郎）を思うという詩からも、疎外感と瘦馬の相関性を看取できるだろう。

杜甫の詩では、彼の貧しさと孤立を表す乗り物として「驢馬」もあり、「杜甫騎驢図」として中世禅林で好まれ、多くの讚が残されている（太田亨「日本中世禅林における杜詩受容―中期における杜甫の困窮像について―」『愛知大学教育学部紀要』六三巻、二〇一六年三月）。この驢馬は日本に生息していなかったが、瘦馬の代替として詠まれることもあった。室町時代中期の禅僧・万里九集の詩文集『梅花無尽蔵』所収の「田子浦」は、題下に「就蒲原之齋藤借瘦馬。馬足有病。雖加鞭不進」とあるが、第一句は「蹇驢聊借土人鞍」と、脚の悪い瘦馬が「蹇驢（脚の悪い驢馬）」と詠み換えられている。『韻府群玉』の抄物『玉塵抄』の「蹇驢嘶」の項には

蹇ハアシナエタリトヨムゾ。ワルイ馬、

足モナエテ、ハヤウエアルカヌ馬ゾ。驢ハ馬ノ類デアレドモ、本ノ馬ノヤウニハナイゾ

とあるので、禅僧たちも中国の驢馬と馬の違いは知っていたが、とりわけ足の悪い馬と驢馬とを重ねてその歩みを描いているのである。以上のように、漢詩の世界における「瘦馬」は困窮の象徴であると同時に、〈官〉の世界から孤立してしまった姿の隠喩でもあった。これは佐野常世の姿そのままであるといえないだろうか。「鉢木」には、前掲の詩や抄物との直接的な影響関係は認められないので、イメージの類似にすぎないかもしれない。しかし、瘦せ馬は常世の「所持品」として登場するだけでなく、「独騎瘦馬」の姿が描かれるという点で、いっそう漢詩世界との相関性を想起せられる。

後場の冒頭（十段「口」「フリ地」）では、鎌倉へ向かう常世の姿が他の御家人と対比されている。「東八箇国の大名小名」たちは、「白金物打ちたる糸毛の具足に、金銀を延べたる太刀刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗り替へ中間きらびやかに」（引用詞章は日本古典文学大系『謡曲集 下』）と華やかに描出されているが、注目すべきは、鎌倉までの道程に乗替の馬が用意してあった点である。仮名本『曾我物語』巻第六で、狩場に駆けつける曾我兄弟が一匹ずつの馬しか持たないことを嘆く場面で、「我々、君に召しつかはれ、御恩を蒙り、ゆゆしき身ならばこそ、馬も引かせ乗替も具して、威儀

をも正しくせめ」とあるように、乗替の馬が所持できるのは、時勢にのっていることの結果だった。

この乗替の馬を持つ御家人たちと対比されているのが、常世と瘦せ馬なのである。「さぞ笑ふらんさりながら、所存はたれにも劣るまじ」と常世は勇み鎌倉へ向かうが、馬はその思いについてこない。「急げども、弱きに弱き、柳の糸の、よれによれたる、瘦せ馬なれば、打てども煽れども、先へは進まぬ、足弱車の」と、ただ一人で瘦せ馬に跨がり鎌倉を目指す常世に、漢詩世界の「瘦馬」のイメージを投影することで、鎌倉幕府という〈官〉の世界から疎外されている彼の窮状が、前場以上に際立つのである。

《鉢木》は、人口に膾炙した最明寺入道廻国説話を基にしているため、前場が注目されがちだが、この曲の趣向が色濃く表現されているのはこの道行である。以前、常世が太刀ではなく、長刀を持つことの意味をこの鎌倉への道程の風流性に関係づけ解釈し、この場面の重要性を論じたことがある（伊海「切合能の研究」）。さらに、常世の馬を瘦せ馬とした意図を汲み取るなら、ここは常世の人物像と境遇を舞台上に立体化させる場面でもあったといえるだろう。瘦せ馬は所有されるだけではなく、不遇と困窮のイメージを発露しない。それに跨がり独り歩むことが必要なのである。

（法政大学教授）